

狸 1 2 狸か川獺か = = = 猪・鹿・狸より

狸が出たからとて、かならずしもそこに棲んでいるとは決まっていなかった。自分の村の上の端れへ出る狸は、山続きの倉木の山から通って来ると言うた。化けたと言う話はあまり聴かなんだが、時々えらい音をさせて、通る人を嚇すと言うた。

村端れだけに、街道脇に張切りの松というのがあった。赤松が蛇のように街道の上へのた



りかかっていた。傍らには馬頭観音や愛宕神〔道祖神〕などの石像が並んでいた。道の下手に弁天を祀った小さな池があった。夏分はそこで雨乞いなどしたものである。ある時某の男が夜遅く通りかかると、竹を一束担いできてすぐ脚下へ投げ出したと思うような、えらい音をさせたと言う。男はそれに驚いてそのまま引き返して来て、自分の家へ泊まっていた。ある大工は、黄昏時に弟子と二人で通りかかると、張切りの松の上から、真っ白い獣が道下へ向けて飛び込んだ。すると続いてえらい音がしたそうである。誰でもここへさしかかると、ボンノクボがぞくぞくすると言う。村の物持ちの某は、日が暮れるともうそこを通れなんだ。そのため生涯通らずに終わったとも聞いた。村のものばかりでない。反って他所のものが気味悪がるとも言うた。誰の話聞いても、こ

こで嚇されたのは、きまってえらい音だった。それで一方の説では、どうも狸ではないらしい。川獺ではないかと言うた。弁天の池から山を少し下ると、寒狭川の鵜の頸という淵がある。そこから川獺が来て遊んでいるのが、人の通りかかったのに驚いて、池の中へ飛び込む、その音



ではないかと言うのである。

何にしても気味の悪い処だった。ある男が日暮れ方通りかかると、道の脇の石に腰をかけている人があった。傍へ寄って見たら、それが男だか女だか、また前向きだか、後向きだかさっぱり判らなんだそうである。

何もここに限った訳ではないが、真夜中などより、却って日暮れ方の方が気味が悪かったそうである。ぼんやり人顔の見える時刻が、不思議なことが多かったと言う。



横山の北の端れにある「滝坂弁財尊天」  
宝暦十年（1760年）の文字が読める。

昭和56年道路の改良工事に伴い現在の  
場所に移転された。